

さ SA く KU ら RA



Oct.2018

発行/ボーイスカウト世田谷第5団広報部

9月9日 カントリーデー ビーバー隊

ビーバー隊隊長 草嶋隆行

恒例の団行事、カントリーデーです。ビーバー、カブ、ボーイ、ベンチャー混成の班に別かれて、それぞれ異なるコースで多摩川までゴミ拾いをします。私が同行した班はややグタグタでしたが、普段のビーバーと違い、ボーイ隊以下の統率にまかせます。何だかあまりゴミを拾うことなくダラっとした短距離ハイクのようになっていました。河川敷では全体ゲームで盛り上がり帰り道は等々力までこちらも恒例のスカウトに道をきいて帰りました。今回は近所で簡単ということもあり、スカウト内での相談通り溪谷を通過して帰りました。



カブ隊

CS 副長 藤田 惣子

カントリーデーとは、清掃奉仕のことだと昨年初めて知ったのですが、子供達が個人ではなかなか出来ない活動であり、ビーバー隊からベンチャー隊までが協力しながら行う、世代間交流を兼ねた極めて意義深い活動だと思います。

今回はすべての班が等々力溪谷を通過しましたが、溪谷の中には、先日の大雨の際に流されたゴミがたくさんあり（周辺の一部家屋も浸水したらしいです）、自然の驚異を肌で感じることも出来たと思います。

猛暑の中でしたが、後半のレクリエーションを含めて、この高潔で誇り高い活動をスカウト達が自然に楽しんでいる様子を見て、清々しい気持ちになった一日でした。



カブ1組

今日はゴミひろいをした。ビンやタバコのすいがらがたくさんあり、ふくろいっぱいになった。ゴミはすてないようにしよう。



ボーイ隊

BS隊トナカイ班 [redacted]
等々力溪谷のゴミ拾いの活動を通してカブスカウト、
ビーバースカウトの安全ややるべきことを伝えたりす
ることの大変さを知りました。来年班長になりますが、
この経験を生かしたいと思っています。

BS隊トナカイ班 [redacted]
ごみ袋を持って沢山のごみを拾いました。疲れたけど、
キレイになったので良かったです。



ビーバー隊

9月16日 なしもぎ

ビーバー隊隊長 草嶋隆行

例年通りの秋の企画としてなしもぎに行きました。い
つもお世話になっている登戸の三平農園です。毎年な
しもぎと言いつつ、梨が終わっていることを反省し、
今年はぎりぎりセーフのタイミングで行けました。ド
雨の中で決行した昨年とは違い、今年は雨も降らず各
自思い思いに狙いをつけた梨を取ることができました。
取った梨は早速試食！みずみずしい甘さのもぎたての
梨をみんなで食べました。

逆に例年とは違いメインの梨があったため、いつも
のいろんな野菜や果物をいっぱい取ることは出来ず、
ちょっと物足りない部分もありました。今度からは隔
年で梨と野菜にしようと思います。



カブ隊

9月23日 大山登山

プログラム担当 CS副長三園真也

例年は7時に二子玉川駅集合だったのですが、行程に
余裕を持たせる為に30分早めの6:30に集合。
結果、解散時間ピッタリ！！
まあ、ケーブルカー、バスの臨時便に助けられたのも
ありますが(^_^)
今回は、弱音を吐くスカウト(リーダー含む)も出ず、
怪我も無く、楽しく登山プログラム出来ました。

1組 DL中澤仁

今日は夏季舎営よりも高い山に登るので私も不安があ
りましたが、何とか1組含めてみんな無事に山頂まで
登り怪我もなく帰ってくる事ができてよかったです。
時にはみんなで仲良く歌を歌いながら、相手のことも
気遣いながら楽しむことができたようです。天気にも
恵まれたので、山頂の見晴らしも良く、みんなが達成
感を感じることができたと思います。

カブスカウトは何度も山登りに行けるわけではないと
思いますが、今日の思い出を大切に、また、これ
を良いきっかけに、ますます、カブスカウトの楽し
みを深めて行けるように、私もがんばりたいと思いま
す。みなさまもよろしくお願いたします。

3組 くま [redacted]

今回は学校などを含めて、4回目の大山登山でした。
みんながどんどん進んでいて、びっくりしました。
今回は大山に来る人が多かったため、山にたくさんゴ
ミが落ちていましたが、拾って家で捨てました。
カブスカウトとして、いい活動ができたと思いました。

4組 うさぎ [redacted]

ぼくは大山をのぼって楽しかったです。なぜなら、ぼ
くは、はじめて大きな山をのぼったからです。一ば
ん楽しかったのは、ちょうど上についた時で「やっと
ついたなあ」と思いました。僕は山を登って正解でした。
また、山に登りたいと思いました。



ボーイ隊

8月26日 隊集会 17NSJ片付け

BS隊 オットセイ班

今回のボーイスカウトではジャンボリーの片付けを行いました。
テントを見てみると、土や葉がたくさんついていて、大変そうだなと最初は思いましたが、人数が少なかったにもかかわらずどんどんテントはキレイになって、とてもスムーズに進みました。とても暑いなか、みんながとても頑張っていたので凄いなと思いました。キャンプだけでなく、こういった地道な作業も進んで参加していこうと思いました。



BS隊 カモメ班

片づけにはほんの数人しか来ませんでした。何か理由や用事があるのかもしれませんが、もっとたくさんひとがいれば、片づけも早く終わったんじゃないかなと思ってしまいます。たのしいことだけではなく、裏の片づけの仕事もやってもらいなと思いました。片づけなどをすると、スッキリするし、今回は暑かったので、アイスも出ました！ 片づけをマイナスに思うのではなく、プラスに思って、率先してこういう回にも来て欲しいなと思いました。



BS隊 トナカイ班

今回テントの片付けをしてみて感じた事は、充実したキャンプをする裏側には大変な準備や片付けがあるし、それをしなければ思うようなキャンプは出来ないと、その大切さを理解するいい機会となった。

9月15～16日 オーバーナイトハイク @高尾山

BS隊 オットセイ班

ぼくは初めてのオーバーナイトだった。
決意表明では、「先輩たちについていけるようにしたい」と言ったが、実際に歩いてみるとなかなかついていけなかった。
大変だったことは、ドロが足につくことだった。道にところどころドロが落ちている。中にはにげ道のない場所もあった。帰ったときには、くつもくつ下もドロドロになっていた。
そして、うれしかったことは、カレーうどんを食べられたことだ。まだ高尾山に登る前だったが、それはとてもおいしかった。
みなさんに助けをもらいながら、無事に高尾山に登り切り、帰ることができた。来年のオーバーナイトでは、もっと先輩たちについていけるように、がんばりたいと思う。

BS隊 カモメ班

今回のオーバーナイトハイクは三浦半島ではなく、高尾山エリアで行われました。
去年は冬に歩いたのでとても寒かったのですが、今回は何の問題もなく快適に歩けたのでよかったです。ただ空が曇っていて星が全く見えなかったのはとても残念でした。
普段は人でごった返す高尾山も、全く人の気配がなく、しかも少しきりがかかっている神秘的でしたが、正直少し怖かったです。
やはり昨年同様、ゴールに着いたときの達成感是非常にスゴイものでした。
次回もまた参加したいです。

BS隊 カモメ班

今回ナイトハイクでは、高尾山に登りました。
学校で登ったときより歩きよりの長かったので疲れましたが、虫の鳴き声にいやされました。
思っていた以上にハードな道のりだったうえ、道がぬかるんでいて山を降りたときはくつが泥だらけでした。
出る前に家で昼寝をしたのに、帰りの電車では寝てしまいました。帰ってからも6時間寝てしまっていて起きたときにびっくりしました。

BS隊 カモメ班

初めてのオーバーナイトハイクを、僕はとても楽しみにしていた。山は想像以上に暗かった。近づくにつれ家が少なくなると思ったが、思いのほか住宅があった。山は雨でとてもぬかるんでいた。山頂に着いたら星が見えるかと思ったが、曇っていて何も見えなかった。しかし、ヘッドライトに照らされた山の自然はとてもきれいで、また行きたいと思った。最後になりましたが、明け方まで引率して下さったリーダーやローパー、ベンチャーの皆様、また途中で待っていて下さった保護者の皆様、ありがとうございました。カレーうどんはとても美味しかったです。

BS隊 トナカイ班

今回は、二回目の参加となるオーバーナイトハイクでした。
一度経験しているので、心構えもでき、また今年もやるのか一、と思いつつも準備万端でした。
半日前まで雨が降っていたので、地面もぬかるみ、歩きにくかったですが、途中去年より眠くならず、あまり疲れず、自分の成長を実感できるオーバーナイトハイクとなりました。

BS隊 トナカイ班

初めての徹夜なのでとても緊張した。電車でもドキドキしていた。途中でバテないかと心配だったが、眠くもならず最後まで歩いて楽しかった。でもそのあと時差ボケになった。

*サポート隊 保護者

今回は小6、中1の参加者が多く、雨で道の状態も良くなかったので、大丈夫かな…？と少し心配でしたが、皆元気にゴールできて良かったです。夜中のカレーうどん美味しかったです！
私は八王子が地元なので、高尾山は遠足の度に登るようなとても身近な存在の山でしたが、ここ数十年は縁がありませんでした。これを機に久しぶりに登りたくなりました。

*サポート隊 保護者

オーバーナイトCP1にて、温かいうどんを準備するお手伝いをさせていただきました。
肝試しよりも暗い闇の中から、ちらちらと光が見え出



してスカウトたちが到着し、大人でもけっこう辛いカレーうどんを、皆モリモリ食べてくれました。スカウトたちは元気いっぱい頼もしかったです。こんな皆の姿を見ることができて、とても良い経験でした。

9月23日 隊集会 (VS 大型建築見学) @八王子ひよどり山キャンプ場

BS隊 オットセイ班 [REDACTED]

今回のボーイスカウトでは三脚信号塔を作りました。この前のボーイスカウトで三脚進行塔がどのようなものか教えてもらったので、作り方は分かっていたのですが、完成した時は思っていたより高かったので驚きました。また、作る時に[角しぼり]という結び方を教えてもらいました。とても便利な結び方だったので普段から使っていこうと思いました。

BS隊 カモメ班 [REDACTED]

「これほど大きいものを建てるのは、10年やっていて一度もない」とリーダーは言った。今回は5mもの建造物を建てるのだ。それほどめったにないチャンス！しかし、出来た建造物が高すぎてとても登る勇気がなかった。あとで後悔した。今回は見学だったが、またこのような機会を作っていただき、次はボーイの僕たちも製作に関わりたい。

BS隊 トナカイ班 [REDACTED]

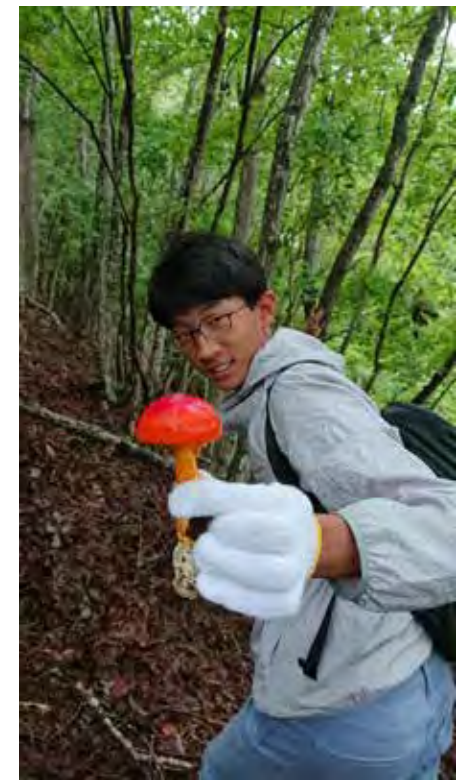
手伝うと聞いて、何かをたくさんつくのかと思ったら、手伝うよりテントを設営する方が大変だった。やぐらは思ったより高く怖くて、てっぺんまで上った人はすごいなと思った。



ベンチャー隊 9月2日 きのこと狩り @甲府

VS隊 [REDACTED]

きのこ狩りという活動を聞いて僕は当日現地につくまで一体僕らはこのあと何をするのか想像もつかなかった。いちご狩りのようなイメージではなかったのだがどこでやるのかも知らなかった。元リーダーの高橋さんの車に揺られ辿り着いたのは甲府！途中寝ていたのが本当に驚いた。そう。きのこ狩りというのは山の中を歩いてきのこを探すことを指すのだった。生まれて初めてできのこも得意ではないのではじめはととても不安だったがやってみると案外面白いものだ。山の急斜面を下から見上げ自分の視界を隈なく見渡す。落ち葉に紛れ込んでいてわかりにくい当たりにはたくさんきのこがある。もちろん食べられるきのこは僅かであるが、全部が全部食べられるものであったら面白みもない。インストラクターの方に一個一個聞きながら自分たちも食べるやつ食べないやつを見分けていく。宝探しをするような気分で幼少期にかえたかのように宝(キノコ)探しに興じた。計5人で収穫したキノコは高橋宅にて料理してもらった。オムレツやパスタ、うどんの3品を作ってもらったのだがどれも一流レストランでも出せるレベルの美味しさと濃厚さがあり、きのこの香りがこれでもかと言うほどたっていた。今まで苦手としていたキノコをここまで美味しく食べたのは初めてである。今回の活動は参加人数が少なかったが「僕きのこ嫌いなんです」などと言わずに、もしこの活動の第二弾が決定したらぜひとも参加するべきだ。



ローバー隊

「8年越し」
ローバー隊
神田貴史

8年前、中学一年生の私は第15回日本ジャンボリー（15NJ）に参加した。それは、私のボーイスカウト活動における一大転機であった。

過酷な環境下での長期キャンプ。今までに見たことが無いほど大勢のスカウトが集まっていることに感動したこと。普段できない貴重な体験。新たな自分の特技の発見。様々な出来事があった。

そんな思い出深い15NJから8年、今度は引率のリーダーとしてジャンボリーに参加することになった。そこで、8年前のスカウトとしての参加経験と比較する中で、今回の参加スカウト達に対して感じた事がある。

何人がこれを読むか分からないが、参加スカウト達に向けて、あるいは8年前の（そしてもしかしたら8年後の）自分に向けて、いくつか書こうと思う。

一、時間を意識するという事

「時は金なり」ということわざがあるように、時間の重要性に関しては議論の余地がない。そのことは、キャンプをはじめとしたボーイスカウト活動でも同じである。プログラムの時間が決まっているのだから、それに間に合うよう行動しなければならない。簡単なようだが、これが意外に難しい。特に年長者が時間の管理を怠るようだと、スケジュールを守る事は至難である。

8年前、時計もせずに出発した私は、時間を意識することなく、目の前の事をこなすのに必死だった。もちろん、スケジュールを守れなかったのは言うまでもない。

今回、初日に参加スカウト達を見渡して腕時計の着用率に軽く絶望しつつ、どこか共感を覚えた。彼らもこれから失敗するだろう。そう思うと、8年前に時計をせずにやってきた自分自身を見ているような気持ちになる。ジャンボリーが終わって次の活動に参加するときには、彼らも腕時計をするだろう。自らを振り返ってそんな予想をたてて、ムフフとするのだ。

ただし、腕時計をするだけで時間を十分に意識できるようにはならない。腕時計の着用に加えて、スカウトは何をすればいいのだろうか？

二、先を見据えるという事

予定を把握し、今後の状況を予想する。それが「先を見据える」ということである。ボーイスカウトでは、グリーンバーが主体となって今後のプログラムの内容を把握し、明日、明後日、さらにその先の行動予定を決めておくことが重要である。特に、予定を決める時に現場をどれだけ具体的に想像出来るかがポイントである。事前の想定がいかに具体的であるかが、本番での行動のクオリティを左右するのだ。

例えば日帰り登山の荷物を考えてみよう。雨が降る可能性があれば雨具が、靴擦れをする可能性があれば絆創膏が、いざと言う時のために非常食が、、と様々なことが想定される。この準備に必要なのが、まさに先を見据える力である。

ボーイスカウトのモットーに「そなえよつねに」があるように、良い準備には想像力が欠かせない。ジャンボリー期間中、スカウト達は想像力の無さに苦しんでいた。持ち物が足りないのも、配給に遅れるのも、先を見据えてないからだ。登山やジャンボリーに限らず、日々の生活の中で「そなえよつねに」を意識し、先を見据える力を高めなければならない。

では、先を見据える力、つまり具体的に現場を想像する能力を訓練するにはどうすればいいのだろうか？

三、失敗を経験するという事

*****引用開始*****

本気でやった場合に限るよ
本気の失敗には価値がある（小山宙哉『宇宙兄弟』第58話）

I have not failed. I've just found 10,000 ways that won't work（Thomas Edison）

私は失敗したことがない。ただ、1万通りの上手くいかない方法を見つけただけだ（トーマス・エジソン）

失敗は成功の元（ことわざ）

*****引用終り*****

などの言葉にあるように、失敗には非常に貴重な価値

があり意味がある（エジソンの言葉は失敗を失敗と見なしていないが、意味内容としては同じである。ちなみに、混同されがちなことわざに「必要は発明の母（Necessity is the mother of invention）」がある）。特に理系の世界では、最初から実験が成功する事は非常に稀で、膨大な失敗の上に成功が訪れるのが当たり前。失敗は無駄にはならない、あるいは失敗を無駄にしないように行動すべし、ということが言える。

私の8年前の15NJに関しては、圧倒的につらい思い出の方が多かった。実は、日中のプログラムの具体的内容に関してはほとんど覚えていない。キャンプ生活の困難や失敗した記憶がほとんどである。しかし今振り返ってみると、そのジャンボリー期間中の失敗の経験が、今の自分のスカウト活動のみならず、普段の生活や生き方にまで影響していると感じる。そしてこれは私だけに当てはまる特殊なことではないと思う。

今回、17NSJにリーダーという立場で参加し、スカウト達の行動を観察して過去の自分と重ね合わせた。苦い経験をしたスカウトは多いだろう。しかし彼らは、価値のある失敗をしたのだ。ジャンボリーに参加し苦労した経験が、いつか彼らに良い影響をもたらす。失敗した経験がアドバンテージになる時が必ず来る。彼らの8年先を生きている私は、そう確信している。

兎にも角にも、ジャンボリーは素晴らしい経験である。まだ8年経っていない今回の参加者達には、それが分からないかもしれない。次は行きたくないと思っているスカウトもいるかもしれない。しかし、いつかまたジャンボリーに行きたいと思い、そして今回のジャンボリーを思い返し、そこで経験したことの意味を理解する日がきっと来る。

全てのスカウトが、そんな「8年越しのジャンボリー」を経験することを切に願っている。

「ボランティア」ローバー隊 保科玄樹

8月3日から10日にかけて、石川県珠洲市鉢ヶ崎総合公園で行われた第17回日本スカウトジャンボリーに行ってきました。前回の第16回日本ジャンボリーと異なり、今回はリーダーとしての参加です。スカウトとしてではなくリーダーとしての参加だったため、ボーイスカウトの「ボランティア団体」としての意味について考えたジャンボリーとなりました。

ボランティアを特徴付けるのは、公共性・自発性・無償性・先駆性などですが、“volunteer”という英単語の原義は「志願した人」・「志願兵」です。つまりは「徴収兵」を意味する“draft”の対義語であり、そのことからわかるようにボランティアの最も重要な特徴は公共性や自発性にあります。

近頃東京オリンピックのボランティア募集要項における負担の重さが話題になっているため、「そもそもボランティアとは何か？」ということについて人々の関心が高まっていますが、ボランティアは本来的に「タダ働き」を意味するものではありません。「無償性」は結果としてボランティアと極めて相性が良いことは確かですが、本質ではない。そこを勘違いすると、いわゆる「やりがい搾取」を招くので注意が必要です。

今回のジャンボリーでリーダー達は、小学校6年生から中学生3年生までのスカウト達がキャンプサイトを設営・管理し、食事をしっかり採り、そして存分に活動出来るよう段取りしました。昼間の気温は39度を超えることもあるほど暑く、逆に夜間は冷えてテントが結露しました。そんな厳しい環境下で無償性も含めたボランティアが成立していることは、本当に素晴らしいことだと思えます。

ジャンボリーでの私の仕事は健康管理。捻挫をしたベンチャースカウトに付き添って病院まで行ったり、帰りのバスで体調不良になったボーイスカウトの面倒を見たりしました。

つまり看護係だったわけですが、考えてみると看護という行為は前述のボランティアの定義と深く関係しています。完全にビジネスライクな態度だけでは、おそらく看護は成り立ちません（その点で、教育も似たようなものでしょう）。しかしかと言って、完全に無償の奉仕だけで看護システムを維持出来るかと言えば、それも難しいでしょう。

近代看護の祖であるフローレンス・ナイチンゲールに、次のような言葉があります。

*****引用開始*****

I also depend on spirit of member's service, but that's also powerless without economic aid

構成員の奉仕の精神にも頼るが、経済的援助なしにはそれも無力である

*****引用終り*****

この言葉は、ナイチンゲールが「タダ働き」、つまり「自己犠牲」に対して批判的であったことを示しています。その証拠に、ナイチンゲールは（意外なことに）赤十字の設立に反対の立場でした。その理由には彼女の看護に関する深い洞察が含まれています。そしてそれは真のボランティア・真の奉仕とは何かを考える上で大変参考になるので、調べてみると面白いでしょう。

以上のように書くと、もしかしたら「つまり、ボーイスカウトの奉仕活動に対して、給料を支払って欲しいと言っているんだな？」と思う人がいるかもしれませんが（そんな誤解は、まずしないと思いますが）。もちろんそうではない。そうではなく、ナイチンゲールの考えは、ボランティアとは何か、ボーイスカウトとは何かを考える上で非常に重要な視点を与えてくれる、ということです。

あるいはナイチンゲールの考えは、ボーイスカウトという奉仕運動が成立していることの素晴らしさを逆照射してくれる、ということも言えるでしょう。

ジャンボリーで看護のボランティアをすることを通して、このようなことについて考えをめぐらしたのでした。

4年前、山口県山口市きらら浜博記念公園で開催された第16回日本ジャンボリーにスカウトとして参加した時も、終わった後はとても疲れていました。しかし、今回の疲労度は前回の比ではありません。

長期間スカウトの面倒を見ることによる精神的緊張や、行きと帰りでバスに13時間は乗っていたことによる肉体的負荷から、帰宅後は腹痛に襲われました。他にも、例えばテントを始めとした大きな荷物のコンテナへの積み込みをこなすため、最終日に午前4時に起床して作業したのは相当こたえました。

つくづく、ボーイスカウト運動の成立は不思議です。その不思議は、きっと（損得勘定を超えた行動が出来るしまう）人間の不思議さに由来するのでしょうか。

ボーイスカウト運動は、究極的には社会を良くする運動です。ですからそれは、様々なことと関係しています。

私が大学で所属している建築学科での勉強も、建築の設計や管理という具体的な目的だけでなく、ボランティアとか奉仕とかいったものを經由して社会を良くするという目的に繋がっているのだということが、少し分かった気がします。

ボーイスカウトについても建築の勉強についても、ジャンボリーをきっかけにしてもっと考えてみようと思います。

科学と詩 第10回
ローバー隊隊長 渡口要

(つづき)

10.4. 雨への「そなえ」

前回説明した「まざり」がスカウト活動のどの部分に見出されるか、いくつか例を見ていきます。

最初に紹介するのは、雨の中での活動です。

2016年さくら3月号の【月の輪ハイク感想】で、土砂降りのハイキングの話をしました。そこで、ボーイスカウトが雨の中でもプログラムを実行する理由として、「訓練」と「パルタージュ (partage)」の2つがあると言いました（「パルタージュ」の意味については、2015年さくら4月号の【もちつき感想】をご覧ください）。

「訓練」と「パルタージュ」は、それぞれ以下に示す複数のイメージと対応しながら、互いに「まざり」合った関係にあります。

・訓練のイメージ：科学・具体・能動態・手段・論理・合理・リアルタイム・意識

・パルタージュのイメージ：詩・抽象・中動態・目的（価値）・感情・神秘・事後的・無意識

「訓練」と「パルタージュ」の「乳化 (emulsion)」の中に、ボーイスカウト活動の意義がある。そのことを、2016年さくら3月号の【月の輪ハイク感想】では以下のように表現していた（と今から振り返ると解釈できる）のです。

*****引用開始*****

こういうわけで、強い雨や風の経験は、未来の試練に向けた備えになるとともに、過去の想い出のスパイスになります。過去から未来、そして未来から過去、二重の意味で、我々の人生を豊かにしてくれるのです

*****引用終り*****

ボーイスカウトの「そなえよつねに (Be prepared)」にとって、雨は最大の関心事です。装備的に、計画的に、技術的に、そして心構え的に雨にそなえること。それは科学的でも詩的でも無く、あるいは能動的でも中動的でも無く、それらがまざったやり方です。

一方では、雨に対して能動的に動かなければ、寝袋はびしょ濡れになり、テントは流されます。雨に対しては科学的・合理的に対処しなければなりません。それが、スカウト活動が常に訓練である、ということの意味です。

他方、自然現象としての雨自体を科学的に止めることは、人類にはできません。天候はどうしようもない。であるならば、スカウトがやるべきは、雨を中動的に覚悟をもって「引き受ける」ことです。雨を楽しむことです。この態度は、スカウトソング「むこうのお山」の歌詞によく表れています。

*****引用開始*****

むこうのお山に　黒くもかかれば

今日はきそうだ　大タ立

そなえよ常にだ　干し物片付け

テントに雨水　入らぬように

ひときわ吹き来る　涼しい風に

パラ　パラ　パラッ　と大粒雨

パラ　パラ　パラ　パラ

パラ　パラ　パラ　パラ

ザザザザ　ザザザザ

ザザザザザーザー

テントの中は　金城鉄壁

雨でも槍でも　苦にやならぬ

サアサア　歌いましよ

ララララ　ララララ

ララララ　ララララ

ラララララーラー

*****引用終り*****

この歌詞を「アルプス一万尺」のメロディーで陽気に歌うこと。私もボーイ隊だったころ、大雨の夏キャンでこれを半ばヤケクソ気味に歌ったことがあります。当時（リアルタイム）は大変でしたが、事後的に振り返ると、それはいわゆる「いい思い出」です。したがって、これは雨に対する詩的な対処であり、スカウト活動が仲間とのパルタージュの経験であることを示しているのです。

雨の中の活動を例に、スカウト活動が科学と詩、能動態と中動態、訓練とパルタージュの「まざり」であることを説明しました。ここでさらに考えを進めると、ボーイスカウト運動はあらゆる意味での「まざり」であることに気づきます。

年代も、地域も、人種も、思想も、宗教も、政治的立場も、全てがボーイスカウトの中ではまざっています。元気なスカウトと、おとなしいスカウトがまざっています。素直で行動派のスカウトもいれば、ひねくれて理屈っぽいスカウトもいます。極端に言えば、「アウトドアが苦手なスカウト」すらいます（ボーイスカウトに入っているのに、意味不明だと思うかもしれませんが。しかし私の経験では、そのようなスカウトも少なからずいます）。

それら雑多なスカウトが集まった「まざり」を抱え込む「器」。2018年さくら4月号の【永遠のスカウト】では「家族」と表現したもの。この「器」とか「家族」といった特徴を、2015年さくら4月号の【もちつき感想】ではパルタージュと呼んだのです。あるいは同じ意味の日本語として「同じ釜の飯を食う」という表現があることを指摘したのです。その部分を以下に引用しておきましょう。

*****引用開始*****

同じ釜の飯を食べたからと言って、べつに考えが同じになったわけでもないし、ましてや同じ性格になったわけでもありません。それでも、「同じ釜の飯を食う」というだけで、僕らは仲間になれるのです

*****引用終り*****

あるいは、2017年さくら11月号の【堀江君の文章】や2017年さくら12月号の【笈田君の文章】にも、地域・人種・思想・文化の「まざり」が見出せます。彼らが通うアメリカやカナダの学校は、まさに多様性の「器」として機能しています。様々な国の友人との交流やカルチャーギャップの経験を報告してくれる彼らの文章は、我々が認識できる「まざり」の範囲を広げてくれ

ます。

そして言うまでもなく、先々月（2018年8月）に行われた第17回日本スカウトジャンボリー（17NSJ）は、パルタージュの経験・「まざり」の範囲拡張という意味で、海外の学校と同じ機能を果たしたのです。

2018年さくら4月号の【神田君の文章】の最後に、「ボーイスカウト運動全体のデザインはどのようになっているのか」という問いがあります。私の考えでは、その答えは「様々な人間の『まざり』を『まざり』のまま抱えこむようなデザイン」です。例えばデンコーチや上級班長は、まさに年代の「まざり」を意識したシステムデザインです。あるいは、チャレンジ章やターゲットバッジや技能賞が2018年さくら6月号：【7. Semagram】で紹介したピクトグラム、つまりユニバーサルデザインになっていることは、言語や文化の壁を越えた「まざり」を志向しています。

今から振り返ると、これらボーイスカウト運動のデザイン上の特徴を、過去のさくらの原稿では「もちつき=パルタージュ=同じ釜の飯」と呼んだり、「理論と実践」あるいは「観察と推論」といった2項対立を考えることで示したり、「雨の活動」に関連させて表現したりしてきたのです。

そして今回の「科学と詩」は、もっとも「まざり」にくい（ように見える）2項対立です。そうであるからこそ、ボーイスカウトにおける「まざり」の重要性を示すために、私は「科学と詩」というタイトルを選びました。つまり、科学と詩の2項対立の「まざり」を描き出すこと。それが、「まざり」の重要性を示すのに最も効果的だと考えたのです。

10.5. 「まざり」の中をさまようこと

科学と詩の第1回

科学と詩の第1回は、2018年さくら1月号から始まりました。ここでは、B-Pの著作『Rovering to Success』を紹介し、“Rover”が「さまよう人」を意味することについて説明しました。

今ここに至って分かるのは、そこで“Rover”がさまようのは「まざり（乳化, emulsion）」の中だということです。理論と実践、観察と推論、そして科学と詩。あるいは様々な年代・地域・人種・思想・宗教・政治的立場。これら雑多な「まざり」を、訓練しパルタージュしながらさまようこと。しかもただ漫然とさまようのではなく、時には惑星探査車（rover）のように勇敢に、またある時には移動局（rover）のように定位しながら慎重に道を切り開いていく。つまり自立し、かつ自律していること。それが“Rover”のあるべき姿でした。

あるいは“Rover”は、“planet(es)”として科学的にみんなで協力して生きていく者でありながら、それと同

時に“vagabond”として詩的かつ孤独に実存の問題を追求する者でもあります。そのような両立は、“zero sum”と“non zero sum”, あるいは能動態と中動態の両立とゆるやかに重なりつつ、しかし実際には複雑に「まざって」いるのです。

科学と詩の第2回

2018年さくら2月号：【3. Success】では、「B-Pは認識こそが真の成功、すなわち幸福に至る鍵だと考え」たと述べました。そして、認識には科学的認識と詩的認識があり、この両者をアウフヘーベン（止揚）することで真の認識・真の成功・真の幸福が得られる、という考えを述べました。

科学と詩の第3回

この考えを「まざり」と接続し、2017年さくら4月号：【4. 科学者にとっての「みる」ことと「はかる」こと】における「光をみる、あるいは光によってみる」や、2017年さくら10月号：【12. 重力波によって宇宙を観ること】における「重力波をみる、あるいは重力波によってみる」にならって標語的に言えば、以下のようになります。

科学と詩の第4回

“Rover”は“mind”と“heart”を使って科学と詩の「まざり」を認識する、あるいは「まざり」によって世界を認識する

科学と詩の第5回

つまり、「まざり」の中の認識こそが、B-Pの言う“success”への道なのです。

科学と詩の第6回

「理論編」としての「科学と詩」第1部も、ずいぶん長くなってしまいました。しかし積み残した話題はまだたくさんあります。2018年さくら1月号：【科学と詩の第1回】で予告した、谷川俊太郎やナイチンゲール、そしてB-Pの父の話はまだしていません。それらは次回からの第2部に登場することになります。

そもそも私は、この「科学と詩」を第2部から書き始めました。第2部を書いていて、その理論的基礎付けを行おうと後から書き始めたのがこの第1部です。

もともとここまで長くなるとは思っていませんでしたが、長くなったおかげでいいこともありました。それは、わがローバー隊のスカウトの原稿から、多くのヒントが得られたことです。

それらのヒントは、すでにこのエッセイの様々な箇所引用させてもらっていますが、2018年さくら7月号の【保科玄樹君の文章：「ボーイスカウトと宗教」】には、今後の第2部に向けての勇気をもらいました。

つまり、「宗教」というデリケートな問題をしっかり扱うべきであると、確信させてくれたのです。

宗教に加えて、ボーイスカウトの3つの誓いの1つ目である「神（仏）と国とに誠を尽くし掟を守ります」の後半、「国」の問題についても扱うべきでしょう。少しだけ予告すれば、それは「左翼」と「右翼」の問題です。私の考えでは、左翼と右翼の対立は科学と詩の対立です。そして、ボーイスカウトは左翼と右翼の「まざり」である、というのが目指すべき結論です。ここでは、B-Pの父が「リベラルな神学者」であったこと、および、2018年さくら8月号：【9. Be prepared】で取り上げたクリント・イーストウッドが「草の根右翼（grass-roots right）」であることなどが重要になるでしょう。

科学と詩の第7回

他にも様々な話題が、今後もローバースカウトのエッセイには現れるはずですが、それらを含めたいくつかの具体例を、第2部以降も科学と詩の「まざり」として扱っていきます。そうすることで、“Rover”がいかに「まざり」の中をさまよっているか、示していこうと思うのです。

科学と詩の第8回

ローバースカウトたちは、それぞれに異なる人生の背景を持っていて、現在の置かれた状況も違います。しかしそれにもかかわらず、彼ら全員が共通して、いかに“Rover”であるかということ。そして、ローバー隊あるいはボーイスカウト運動全体が、多様な“Rover”たちのパルタージュ（partage, ピザの分け合い）あるいは乳化（emulsion, パスタのソース作り）であること。これらのことが、彼らのエッセイから分かるはずですが。

ピザのパルタージュとパスタの乳化。そんなふうに見えて、ローバー隊のエッセイを「まざり」の観点で今後も読んで貰えればと思っています。

2018年9月24日追記

その1

科学と詩の第9回

VS隊の磯田君による大型建築プログラムの素晴らしい写真をボーイ隊HP（http://setagaya5.boy.jp/scout/troop/index.html）にupしていたところ、素晴らしいニュースが入ってきました。JAXAの「はやぶさ2チーム」が、ミネルバ2-1のローバー1A、2Aの2機を小惑星リュウグウに着陸させることに成功した、というニュースです。

詳しくは、例えば次の記事：【[更新]世界初、小惑星上で「自分で考えて跳ぶロボット」はやぶさ2ローバー着陸成功】（https://www.businessinsider.jp/post-

175808）をお読みください。2機のローバーの状態は正常で、リュウグウ表面での探査を開始しているとのことです。

2018年さくら1月号：【2. Rover】を読んでくれているら、例えば記事の中の次の文章に反応出来るでしょう。

*****引用開始*****

ローバーとはrover（歩き回る者）から発生した言葉で、天体の表面を移動できる仕組みを持った宇宙機を差す。ミネルバ2-1はその中でも特にユニークな、跳ねて移動する仕組みを持ったロボットだ

*****引用終り*****

光を感じて活動を変える、太陽電池に光が当たらないときは移動して物陰から抜け出す、跳ねている最中の撮影を試みる、など、地上やはやぶさ2本体からのコマンドがなくても「自分で考えて」動作する自律型ロボットだ

*****引用終り*****

また、2017年さくら3月号から始めた【B-Pとシャーロック・ホームズ、そしてアインシュタイン―観察と推論―】を通して読んでくれているら、次の文章が気になったかもしれません。

*****引用開始*****

ホッピングを移動方式に選んだ理由は、火星や月のような大きな天体と異なり、小惑星の重力が非常に小さいためだ

*****引用終り*****

さらに次の部分は、今月号のさくらの【神田君の文章：「8年越し」】の『宇宙兄弟』の引用とズバリ重なる内容でしょう。

*****引用開始*****

過去の失敗を乗り越えて再びの挑戦：(…) 初代ミネルバは小惑星への投下の際に目標のスピードを超えて切り離されてしまい、小惑星イトカワの表面に着陸することができなかった

*****引用終り*****

それを物理の話から「人々や社会の繋がりの話」にまで拡張した内容だったのです。

ミネルバ2-1の2機のローバーに関する今回のニュースを、ボーイスカウトあるいは“Rover”と関連づけて「読み込む」と、面白いと思います。

その2

上のニュースに続いて、ややマニアックな次のニュース：【宇宙一硬い物質は激レア素材の「核パスタ」！】(<https://www.gizmodo.jp/2018/09/hardest-material-nuclear-pasta.html>)が目にとまりました。今回の本文にもパスタは出てきましたね。

実は、今回「ピザのパルタージュ」と「パスタの乳化」という言葉を出した背景の1つに、このニュースに出てくる「核パスタ」の物理理論があります。せっかくニュースで取り上げられたので少しだけ話すと、この「核パスタ」あるいは「パスタ相」は、「近距離の斥力」と「長距離の引力」とが共存する場合に現れます。そしてこのような「近すぎると離れようとするが、遠すぎると引き合う」ような力が働くシステムは、実は物理の世界では他にも知られていて、ある種の普遍性を持っているのです。

ところで「近すぎると離れようとするが、遠すぎると引き合う」と書くと、何か人間関係のことを言っているような感じがしませんか？ 2017年さくら9月号：【10. アインシュタインの重力】の冒頭、世田谷第5団65周年キャンポリーの「キャンプファイヤーの最後でガリ勉がした、宇宙の話と人々や社会の繋がりの話」をもし万が一詳細に覚えているスカウトがいたら、その時にこの「近距離の斥力」と「長距離の引力」の共存について話していたことに思い至るでしょう。あれは、この種の物理学を学んだ者がSF的妄想を膨らませて、

この妄想の少し詳しい内容はそのうち話しますが、とりあえず次回はこの手のSF的妄想のプロ、詩人谷川俊太郎について触れようと思っています。

その3

気づけば、ノーベル賞発表の季節です。昨年ノーベル物理学賞に「重力波の直接観測」が選ばれることを予測的中させましたが、今年は重力波のときのように自信をもって予測することは出来ません（それだけ、「重力波の直接観測」が圧倒的業績だった、ということです）。

しかし一応予想をしておけば、2017年さくら10月号：【11. アインシュタインの時計、B-Pの時計】で紹介した香取秀俊先生の光格子時計には可能性があると思います。特に今年の11月、質量の単位である「kg」の定義が見直される見通し (https://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2017/pr20171024/pr20171024.html) になっており、とうとう物理の基本単位の定義から「原器」が排除されるという流れがあるので、それが後押しするかもしれません。「秒」の定義も、近いうちに香取先生の光格子時計による定義に変更されるでしょう（ちなみにこれを書いている9月24日は、146年前に「メートル原器」が制定された日です。1872年、B-Pが15歳のころです）。

今年のノーベル物理学賞の発表は10月2日。ひょっとするかも…

(つづく)

会議予定

10月27日(土) 団委員会・団会議 20:00～ 尾山台地区会館第1会議室
11月4日又は11日 育成会役員会 場所未定

育成会より

10月20日(土)21日(日)に行われる『尾山台フェスティバル』に今年も5回としてブースを設けます。昨年と同様、「ロープ結び体験」「火起こし体験」「寝袋体験」の3種類を用意し、体験活動を通じスカウト獲得につなげたいと思います。ブースに於いてはカブ隊と保護者の方々、また交通整理は保護者に加え、ボーイ隊以上のスカウトにもご協力をいただく予定です。交通整理のお手伝いを引き続き募集しておりますので、可能な方は連絡係までご連絡ください。

皆さまのご協力、どうぞよろしくお願い致します。

☆ 10月は隊費の集金月です ☆

10月10日までに、
お子様のお名前で

「じぶん銀行」への振込を
お願い致します。

詳細はHP「入団案内」のページ

<http://setagaya5.boy.jp/scout/kanyu.html>
でご覧下さい。

会議報告

育成会役員会 9月9日 9:30～ 尾山台ロイヤルホスト
・尾山台フェスティバルについて
・会計業務打ち合わせ

団委員会・団会議 9月22日 19:00～ 尾山台地区会館第1会議室
・各隊報告
・けやきネット 9月末までに更新手続きをすること
・WSJ(世界ジャンボリー)2019年 5団からスカウト3名参加予定
・18NSJ(日本ジャンボリー)は東京で開催
・10月1日 新ボーイスカウト会館オープン(日連・東連業務)
・リーダー編成について

夏の思い出コーナー



CS隊うさぎ 森玲於奈/撮影

これは、カブ隊の夏季舎営のなかの課題で、「川カシャ！」(川のある風景を撮影するというコンテスト)入選を目指して撮影された1枚です。

カブ隊のリーダーによる厳正な審査の結果、1位に輝いた作品です。

うさぎの森くん、おめでとう！

ただいま本選に応募中です。結果が待ち遠しいです！

「SCOUTING」誌 2018年9月号
第17回日本スカウトジャンボリー
記念アルバム号は→→→

ID:scouting-magazine
PASS:sonaeyotuneni

